



第6次田川市総合計画

市民ワークショップ

報告書

令和元（2019）年7月

福岡県田川市

目次

1. ワークショップの概要	1
2. ワークショップの経過報告	2
3. ワークショップのまとめ	18
4. 参考	20

1 ワークショップの概要

● 目的

第6次田川市総合計画策定の基礎資料とするため、市民を対象としたワークショップを開催し、市の現況、課題、まちづくりへの要望を把握する。特に、移住・定住について、市民目線での課題や解決策についての考えを把握する。

● 開催日程

- 第1回 平成30(2018)年11月8日(木) 18～20時
- 第2回 平成30(2018)年11月15日(木) 18～20時
- 第3回 平成30(2018)年11月22日(木) 18～20時
- 第4回 平成30(2018)年11月29日(木) 18～20時

● 開催場所

田川市民会館 講堂

● 参加者

田川市内在住 男性7人、女性5人

年齢	男性	女性
20歳代	1人	0人
30歳代	0人	0人
40歳代	5人	1人
50歳代	0人	2人
60歳代	1人	2人

● 司会進行

公益財団法人九州経済調査協会

●第1回ワークショップ 「わたしの人生・田川市でのわたし」

テーマのねらい

田川市での自分の人生を振り返り、自分が田川市に対してどのような思いを抱いているのかを改めて考える。その上で、自分の目線から「田川市のよいところ」「田川市の変えたいところ」を考える。

ワークショップの流れ

①グループでの自己紹介

- ・ ワークシート記入（個人ワーク）
- ・ 自分のおいたちの紹介、田川での暮らしで一番印象に残っていること

②グループで「田川市のよいところ」「変えたいところ」抽出

- ・ ワークシートの記入
- ・ グループでの意見交換

③全体での意見交換

④ファシリテーターのまとめ

ワークショップでの議論のまとめ

■田川市のよいところ

食べ物が美味しい（農産地、炭坑の名残）

- ・ 食い道楽が多いので、美味しくない飲食店はつぶれる。
- ・ 魚が美味しい（炭坑時代の名残）。
- ・ 給食が美味しい。
- ・ 自宅のご飯（お母さんのご飯）が美味しい。
- ・ 農業の産地が身近にある。
- ・ 消費地（福岡市、北九州市など）が近い。

お祭りが盛んで団結力がある

- ・ 歴史的価値のある神幸祭がある。
- ・ 小さな祭りが沢山ある（かつては農業が生活のベースであったが、炭坑のまちとなり、都市的なベースがその上に乗っているため、特徴ある地域）。
- ・ お祭りは世代間での交流があるので子供の教育になる。

地域活動がたくさんある

- ・ 子育て、環境のサークルなど、活動グループ・団体がたくさんある。

人情に厚い

- ・ 引っ越してきた時に親切にしてもらえたので、地域に早くとけ込めることができた。

■田川市の変えたいところ「つなぐ」「自信を持つ」

地域の様々なモノ・コトをつなぐ機能を創る、強化する

①情報の集約・発信機能を強化する

- ・ 子育てや友達づくりなど、どこに何を聞けば情報がもらえるのかわからない。つながる場所が必要。「はじめの一歩」という取組を市が実施していたので、もっとPRして欲しい。
- ・ 情報アプリをつくり、世代別、属性別などの情報を流して欲しい。
- ・ 広報誌が月2回も発行されているので、広報誌を「人と人をつなぐ」媒体としてもっと活用してもらいたい。

- ・ 市の情報が届かないので、どのような活動があるのかわからない。活動・地域資源の見える化が必要である。

②地域の様々な活動をつなぐ場・コーディネーターの必要性

- ・ 子育てなどの小さい活動はたくさんあるが、横のつながりが弱い。リーダー格の人は個性が強い人が多く、人情に厚い人柄の裏返しで、仲間になった人達を囲い込む傾向がある。各活動が横でつながれるような仕組み、音頭取りの機能などが必要。

③世代間ギャップを認識し「善意」をつなぐ

- ・ 高齢者は子育て支援など、若い世代の手助けをしたいと思っているが、昔と今の常識が違うので、若い世代に受け入れられないことが多い。
- ・ 世代間ギャップを双方が認識し歩みよることで、高齢者の善意を若い世代につなげていきたい。
- ・ 高齢者のエンパワメントが必要である。

※エンパワメントとは：「人間は一人ひとりが本来素晴らしい潜在能力を有している」という前提のもと、その力を能動的に湧き出させ、顕在化させることを意味する。「能力開花」。

自分の地域に自信を持つ

①自虐的なPRをやめ地域イメージを良くする

- ・ 人間性が悪い人はとことん悪い。少しでも楽をして生きていく姿勢の人が多く、不正、犯罪、交通事故率の多さにつながっている。
- ・ 大人の背中を見て子供が真似をすることで、「悪い習慣」が世代間で循環している。大人は自分の素行の悪さを自慢するのではなく、素行の悪さを顧みて、子供には世の中に必要とされる人になるために必要なスキルや考え方を教えて行くべき。
- ・ 自分たちのすごさをアピールするために、わざわざ「悪いこと」の誇張し言う。それが地域のイメージダウンにつながっている。世間が言うほど、怖い地域でも柄が悪いわけでもない。

②教育水準の低さを改善する

- ・ 小学生の知的レベルは高いのに、中・高校になるにつれて他地域よりも低くなる。素質ではなく育ちが問題。
- ・ 子供の教育は点をとるだけではない。生きるためのスキル、職業選択が広がるような技術・知恵を身につけることが大切。
- ・ 自分で情報を収集する力を身につけ、自分に自信を持つことが大切。

③雇用環境の多様性をつくる

- ・ 地域での職種が限られているので、次世代に地域に残ってもらうには、職種の多様性が必要。
- ・ 大人がかっこいい社会人の姿を見せることで、子供が自分の将来の職を考えるきっかけにする。
- ・ 職の多様性により地域の所得が上がる。

健康意識を高める

- ・ 炭坑時代の名残で、「宵越しの金を持たない」を美徳とし暴飲・暴食をする人、重病になるまで病院に行かないことを美徳する人が多いので、重症患者が増える。
- ・ 予防にもっと力を入れるべき。

●第2回ワークショップ

「田川市のより良いまちづくりのために必要なこと」

テーマのねらい

第1回ワークショップの内容を踏まえ、田川市をより良いまちにし、市民が引き続き市内に住み続けるために（＝定住のために）必要なことを、参加者の「生活者目線」で考える。それにより、重要な政策課題の一つである「移住・定住」についての施策の方向性を探る。

ワークショップの流れ

①前回のおさらい

②議題別 課題・解決策の抽出

議題と議論の視点

【子育て・教育、高齢者活躍】

「世代をつなぐにはどんなしかけがいる？」

「地域の健康・教育をどのように高めていく？」

【雇用創出、まちの機能】

「田川市らしい多様な働く場の理想は？」≡持続的に稼ぐ力

「こんなまちの機能があったらいいな」（生活者目線から）

③流れ

- ・ ワークシート記入（個人ワーク）
- ・ 前半、後半2つに分けて グループワーク、全体意見交、各まとめ

ワークショップでの議論のまとめ

■子育て・教育、高齢者活躍の課題・解決策

子供の教育水準を上げる

- ・ 地区によって教育格差がある。
- ・ 子供の教育だけでなく、親の教育が必要（道徳の観点からも）。親子共に教育に関する情報が少ない。
- ・ 高校に関しては、地域にレベルの高い学校がないため、受験勉強をあまり頑張らない。県立大学に入りたいけど、学力の問題で入れない地元民も多い。
- ・ 将来の職業を見据えるキャリア教育を小・中学生から行うべき。

コミュニティー力を上げていくための高齢者の活躍、外部人材の確保

- ・ 子供会が少なくなっている。核家族になり、役をいやがる世帯も増えている。
- ・ 地域コミュニティーの活力を保つためには必要な機能なので、地区外の活動などにも参加できる仕組みや、高齢者が活動の手伝いをしやすい環境をつくることが求められる。
- ・ 多世代をつなぐしかけとして、区・組にわかれたワークショップを開催してはどうか。花壇の植え替え、古地図の作成など、コミュニティー全体で取り組む活動を増やす。
- ・ そのワークショップなどを開催するにあたって、地域でインストラクター、コーディネーターの確保が難しい。地域おこし協力隊や専門家の派遣を検討して欲しい。

あらゆる世代の居場所をつくる

- ・ 最終的な目標としては、子供から高齢者までが集えるような多世代型の居場所をつくる。
- ・ 最初のステップとして、世代別の居場所をつくり、徐々に横につなげて多世代型にしていく。その中でも特に、子育て中の保護者が子供をつれて気軽に集える場所は重要。ファミリーサポートの機能拡充など。
- ・ 居場所は、市民中心でつくるが、行政には後押ししてほしい。
- ・ 子供の預かり、送迎などの支援をしたくても、「責任問題」が発生するので二の足を踏む人が多い。安全性をいかに確保するかが重要。
- ・ 実際に利用して欲しい人や必要な人に情報が届いていない可能性がある。世代を越えて情報が届くような仕組みを作る。

■雇用創出

雇用創出

- ・ 地域の特産品であるパブリカなどを活用した商品開発。
- ・ 将来性のあるドローンのヘリポート施設、研修所の設置、ドローン大会の開催。
- ・ 人情に厚い、食べ物が美味しいなど、田川市の特徴を活かした「ホスピタリティ産業」を充実させる。
- ・ 経済効果の高い刑務所の誘致。
- ・ 外国人労働者の受入れの動向には注視する必要がある。

■まちの機能

商店街を活用したコンパクトシティ化

- ・ 商店街（伊田、後藤寺）は駅が近く、交通利便性が良い。利便性を活かして、高齢者住宅や、高齢者サービス事業所、買い物の場所などを設置。役所を商店街に移転。様々な機能を商店街に集約する。

空き家の活用

- ・ 商店街の空き家を活用してIT企業を誘致する。モノを売る場所から遠くの仕事を獲得する場所に。
- ・ 公営住宅の空き家に県立大学の生徒に住んでもらう。その際、地域行事への参加を条件に家賃を安くする、リノベーションを自由にもらうなどして、地域に愛着を持ってもらう。愛着があれば定住につながる。

まちなか健康づくり

- ・ 健康寿命を延ばすことが大切。
- ・ まちなかウォーキングができるように整備をする。
- ・ スマホも活用し、ウォーキングや体操などへの参加に応じてポイントを付与し、商店街で使えるなどの仕組みをつくり、健康づくりへのインセンティブを高める。
- ・ 現在、公民館単位で開催されている健康体操などを広げていく。
- ・ 商店街でラジオ体操やフィットネスができるように整備し、高齢者が気軽にまちなかで運動できるような環境を整備する（高齢者ほど商店街に思い入れがあるので）。
- ・ 行きたくなる場所、運動したくなる場所をつくる。

コミュニティバスの広域化

- ・ 流動人口を増やすために、田川郡と協力し周辺地域でもコミュニティバスを走らせる。

今ある資源の活用

- ・ 人口減少の時代に、お金を使った新しいハコモノ、インフラは必要ない。今ある資源をつなげて、組み合わせて利便性を高める視点が重要。中学校が2校に統廃合される。廃校になった校舎の利活用も重要。
- ・ コンビニに、ケアプランセンターやその他機能を付与して利便性を高める。

●第3回ワークショップ

「田川市に住み続けるために、住んでもらうために」

テーマのねらい

これまでの議論を踏まえ、新しく田川市に住んでもらうために必要なことを、生活者目線で考えることで、重要な政策課題の一つである「移住・定住」についての施策の方向性を探る。

ワークショップの流れ

①前回のおさらい

②議題別 課題・解決策の抽出

議題と議論の視点

【どんな人に田川市に住んでもらいたいのか】

移住して欲しい人材像、地域に不足している人材像

【田川市に移り住んでもらうため、市民に引き続き住んでもらうために必要なこと】

ハード面、ソフト面

【市内外に向けての情報発信の方法】

情報の内容、情報発信の手段

③流れ

- ・ ワークシート記入（個人ワーク）
- ・ 全体意見交

ワークショップでの議論のまとめ

■ どんな人に田川市に住んでもらいたいのか

子育て世代

- ・ 子供が増える。長く住んでもらえる。
- ・ 子供の生活や教育に関わるので、真剣にまちづくりにも関わってくれることを期待したい。

大都市圏の人

- ・ 福岡市で家を持ちたいけど、土地が買えない人などは、生活しやすい田川市は魅力的に映るのではないか。

年金収入のある定年退職した人

- ・ 定年者の都市圏からの I ターン、U ターン。「年金」という収入があるので、地域の経済が潤う。
- ・ 知識、経験もあり、地域活動のコーディネーターや、まちづくりの牽引役に期待できる。外の人として冷静に地域をみることができる。
- ・ ゆくゆくは介護需要も生まれ、若者の雇用につながる（福祉分野は地域の雇用の場）。

冷静に田川市に対して建設的な意見を言える人

- ・ 客観的な意見を言って欲しい。閉鎖的な環境を打破して欲しい。
- ・ 中にいるとなかなか気づけないので、新たな田川市の魅力を発見して欲しい。
- ・ 外とのネットワークを持っているので、色々な人とつなげることができる。

地域コーディネーター

- ・ 地域に点在する活動を面をつなぐことができる人。
- ・ 志があり、リーダーシップを発揮してくれる人。

■ 田川市に移り住んでもらうため、市民に引き続き住んでもらうために必要なこと

教育関連の助成・支援

- ・ 教育費、給食費の助成。
- ・ 各学校で特色ある塾を開く。勉強だけでなく、スポーツや音楽、絵画など様々なことを

教えてくれる場所をつくる。誰でも好きなときに、好きな場所にいけるようにする。

総合病院の充実

- ・ 現在、患者が飯塚病院に流れているので取り戻す。
- ・ 田川市内は訪問看護機能付きの施設が多いので、在宅医療やホスピス機能を高めていく。
- ・ 県立大学と連携して、ホスピスの知識や機能を備える。

働く場所の確保

- ・ 会社を辞めて親の介護でUターンする人もいる。息抜きも兼ね、短時間で働ける場所をつくる。
- ・ 移住の魅力を高めるためには、職種を増やすことが必要。

安全・安心に住めるまちにする

- ・ 人の住まなくなった空き家を手入れする。
- ・ 草刈りを定期的に行い、道路をきれいにする。
- ・ リサイクルが進んでいるまちにする。
- ・ 安全・安心について足りないところがあっても、これから確実によくなることをPRする。

ニュータウンの形成

- ・ 移住者が各集落に入り込むことが理想だが、閉鎖的な地域なので、まずはまちなかにニュータウンを形成し、新しい人の「数」を増やしていくことが重要。
- ・ 地域の様々な役が高齢化している。次に担う人がいない。また、高齢者ばかりになって入りづらい雰囲気もある。地域の行事のほとんどを高齢者が決めているような状態。
- ・ しがらみのない人が地域に入り、色々と既成概念などを打ち壊して新しいことを始めてくれると、それをお手本に若い人たちが育ってくれる。

廃校の活用

- ・ アートやスポーツ、音楽など、中高年が気軽に楽しめる場所をつくる。
- ・ 道の駅のような、地元のお母さんの店など、田川市の食を活かした場所をつくる。

移住コンシェルジュを配置する

- ・ 活動や人の紹介など、地域の様々なものを結びつける役を担う人を設置する。
- ・ 田川市に住むと何ができるのか教えてくれる人。

■ 市内外に向けての情報発信の方法

大都市圏でのPR

- ・ 人が集まる大都市圏でアンテナショップを開く。

先進事例の真似をする

- ・ 人気のあるウェブサイトのコンテンツを参考に、田川市のHPを充実させる。
- ・ 自治体の先進事例を参考にする。

「変わる田川市」をみせる

- ・ キーワードは「ムーブメント」。これから変化するまちの方が面白く魅力的。
- ・ 現在のデメリットを認めたとうえで、これから良い方向にどんどん変わることを宣言し、その姿をみんなに見てもらおう。デメリットも情報発信の「ウリ」にする。いっしょに変えてくれる仲間を募る。

田川市ファンクラブを形成する

- ・ 県立大学の学生は1,000人いるので、卒業生をゆるく、長くつながれる、田川市ファンクラブを形成する。
- ・ SNSなどを活用し、首都圏に出て行った人達ともゆるく、長くつながれるようにする。
- ・ 田川市民一人一人のシビックプライドを醸成する。愛着があることが何よりも重要。

※シビックプライドとは：自分自身が都市を構成する一員であると自覚し、都市をより良い場所にするための取組に関わろうとする当事者意識を伴う、都市に対する誇りや愛着。

世代にあった情報媒体を選ぶ

- ・ 若年層は、情報源のほとんどがスマホ。SNSをうまく利用する。
- ・ ニッチ層に届くような雑誌、YouTube、テレビやマスメディアなど、プロ（専門家）に頼んで戦略的に情報発信をする必要がある。

フィルムコミッションの活用

- ・ 田川市のフィルムコミッションをもっと活用する。
- ・ フィルムコミッションがあるのに、市内に映画館がない。期間限定でもよいので、田川市が写っている映画の上映会を行う。

●第4回ワークショップ 「10年後の田川市に向けて」

テーマのねらい

これまでの議論を踏まえ、10年後の田川市のあるべき姿、ありたい姿を考え、将来を示す言葉をつくる

ワークショップの流れ

①将来を示す言葉をつくる

- ・ 10年後こうありたい（こうあったらいいな）ことを考える
- ・ 10年後に向けて、こんな姿勢、心構え、考え方で取り組むべきことを考える

②流れ

- ・ 付箋紙に思いつく言葉、内容を自由に書く（個人ワーク）
- ・ 付箋紙を中央の模造紙に貼りながら想いを述べてもらう（全体ワーク）

ワークショップでの議論のまとめ

■ 10年後の「こうありたい」姿 10年後に向けた心がまえ

農業を学べるまち

- ・ 子供達が日常に食べている食事がどうやってつくられるのか。食べ物に感謝できるような、体験学習ができるまちにしたい。
- ・ 田川市の美味しいものを提供する。

学校に特色のあるまち

- ・ 地元の学校を外に自慢できるような特色のある教育、取組をしてほしい。
- ・ 学校ごとに特色を出して、「学校が面白い」と子供や地域の人が思えるようにして欲しい。

教育環境を整える

- ・ 教育・偏差値をベースラインに戻す。教育水準が低いと子育て世代は出ていってしまう。
- ・ 子育て世代に住んでもらう・住み続けてもらうために教育環境を整える。
- ・ 公立の小・中・高校一貫教育をつくる。受験に縛られずのびのびと勉強ができ、将来のことを考える余裕ができる。子供の選択肢を増やす。
- ・ 子供が礼儀正しく育つような環境づくり。

未来に向けての発想ができるまち

- ・ 田川市には、1年間の暦に応じた行事が残っており、季節を感じる事ができる。それを次世代にきちんと伝えられるまちにしたい。
- ・ 田川市は、農業と炭坑のまちで、それぞれ気質が異なった人が混在している。芸能人や芸術家の輩出も多い。
- ・ 田川市には守るものと新しいもの両面がある。古い文化と新しい文化が融合することで、未来につながる。

今の充実した生活を続ける

- ・ 今の充実した生活を10年後も保っていたい。行きたいところに、行きたいときに行き、会いたい人に会いたいときに会う。
- ・ よく食べ、よく寝て、よく働くといった当たり前のことが続く生活であって欲しい。
- ・ パーソナルな充実感の積み重ねが地域を良くしていく。

- ・ 屈強でメンタル面が強い人が多いというイメージを持たれがちだが、精神的な疾患を持つ人も以外と多い。イメージが先行している。

都市機能が充実したコンパクトシティをつくる

- ・ 内需が逃げないように、商店街・駅周辺に、病院や介護施設、商店など、必要機能を集めてコンパクトシティを形成する。
- ・ 高齢になって免許返納後、車がなくても生活できるような環境をつくる。
- ・ 高機能なコンパクトシティを形成すれば、コミュニティができて子供も集まるし、活気がでてくる。

生活に「ちょうどよい」サイズであることをPRする

- ・ 福岡都市圏では行列のできるチェーンの飲食店でも、田川市の店舗では並ばずに入れる。ゴルフのうちっぱなしも安くて施設も広い。その他生活のちょっとしたサービスが楽に享受できる。
- ・ 市民プールは旅行雑誌のランキングで1位を獲得している。運動公園の中にあるので便利。入場料も安く、駐車場が無料なので、北九州などからも人が集まる。
- ・ 市内でにぎわいをつくっていくためには、生活圏の情報を広く外部に発信していくことが重要。

山を越える理由をつくる

- ・ 子供が行って楽しい場所をつくったり、リサイクル品でオブジェをつくったり、盆地の田川市まで「山を越えてまでくる理由」をつくる
- ・ 田川市らしいライフスタイルを紹介する。「体験」を大切にする。ぶどうなどの果物がとれる。フルーツ狩りや、果物をつかった「食」などで人を呼び込む
- ・ 資源の豊かさでは糸島市に負けてないと思うが、イメージで負けている。
- ・ 変わっていく田川市、田川市のムーブメントをみせる。

情報発信の内容・手段を充実させる

- ・ 市のホームページの構成では、欲しい情報にたどり着くまでに時間がかかる。あるいは、情報は載っているのにたどり着かない。
- ・ 市内にある情報を見やすくまとめてあるサイトが欲しい。
- ・ 市のHPには、生活に密着した情報サイトにすぐに行けるようにバナーは張る。
- ・ 若い世代の情報収集はほとんどスマホで行うので、スマホ仕様の情報発信の強化を。料金、時間、様子など細かい情報が載っていることが重要。写真の掲載は大切。
- ・ テレビの情報発信力はまだまだ健在。田川市の色々な場所をテレビで紹介して欲しい。

市民の「証」を考える

- ・ 郷土愛を深めるために、市民なら誰もが「これはできる」ということをつくる。例えば、みんなマスコットキャラクターのたがたんの絵が描けるなど。
- ・ 住民全員が宣伝部長になる。田川市の良いところ・自慢したいところ、他の地域とは違って面白いところなど、「田川市あるある」をまとめる。

ソーシャルインクルージョンを深める

- ・ 地域で障がい者、高齢者が自然と活躍できるようにする
- ・ 農業の跡継ぎ不足が問題になっているので、福祉と連携して農地を活用していく。

※ソーシャルインクルージョンとは：「全ての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合う」という理念

環境を大切にする

- ・ ゴミのリサイクル率を向上させてイメージをよくする
- ・ 水を大切にするまちにする。
- ・ 「再生」で象徴的なモニュメントをつくる。

地産地消をすすめる

- ・ 色々なものの地産地消を促す。
- ・ 地元就職を促す。

3 ワークショップのまとめ

■ワークショップを終えて

第1～4回のワークショップでは、田川市に住み続けるために、あるいは新しく住んでもらうために必要なことについて、様々な方向から地域の生活者ならではの認識やアイデアが得られた。

田川市は、食べ物がおいしく、居住環境や自然環境など生活に「ちょうどいい」サイズのまちであり、さらには、そのちょうどよさが、他地域から人をひきつける魅力になる。参加者の共通認識としては、田川市には既に十分な「地域資源」があるが、それらの情報がない、あるいは点在しており、市民が把握しづらい状況にあるため、地域資源を生かし切れていないということであった。

各回共通して活発に意見が出されていたことから、「地域の情報集約・発信方法」については、重点課題として取り組む必要があるだろう。また、世代に応じて確実に情報を届けるためには、広報誌、雑誌などの誌面、ホームページ、ブログ、SNSなどネット、テレビ・ラジオなど情報発信の媒体選択が重要となる。

以上のことより、これからの田川市に求められることは、抽象的な表現ではあるが、様々な「モノ・コト・ヒト」の集約・編集・発信であると言える。

■施策の方向性

①住民主導によるあらゆる世代が集える、居場所づくり

子供教育や市民の孤立を防ぐために、まちなかの空き店舗や、廃校、空き家などを活用して、気軽にまちの人たちが集える「居場所」づくりが必要となる。「全世代型」の居場所を最終目標とし、最初は「子育て世代」の集まる場所など、世代を分けた場所を設置する。

居場所づくりにおいては、自由な発想で市民のニーズに対応していくことが重要になるので、市民主導での実施を促し、行政は側面支援を行う。

②情報の集約・編集・発信機能の強化

地域内におけるまちづくりの活動主体を面的につなげたり、活動への参加のきっかけをつくるうえで、情報の集約や必要な情報に編集する機能の強化が必要となる。世代別や生活ステージ別など幅広い情報が求められるため、情報発信の専門家や地域おこし協力隊、NPO、県立大学の学生の協力を得ながら、情報の集約や編集、効果的な発信が求められる。

③商店街を核とした「健康」コンパクトシティの整備

高齢者の安全・安心な生活や、移住者の暮らしやすい生活環境を確保するうえで、交通利便性の高い地域へのまちの機能の集約化が必要となる。商店街・駅周辺に、商店や福祉施設、病院、住宅など様々な機能を集約させることで、利便性が高く暮らしやすい地域となる。さらに、市民の健康づくりに向けて、まちなかで気軽に運動ができるような機能も付加していくことが重要となる。また、機能集約・強化においては、今ある施設や設備などを利活用し、最低限の費用で整備することが望まれる。

④移住・定住の促進に向けた生活に「ちょうどいい」田川市のPR

田川市は、食べ物がおいしく、居住環境や自然環境など生活に「ちょうどいい」サイズのまちであり、さらには、そのちょうどよさが、他地域から人をひきつける魅力になっている。その「ちょうどよさ」を移住・定住につなげていくために、一戸建など新居を求める福岡都市圏居住者へのPRなど、情報発信のターゲットや手法を検討することが必要となる。

⑤農業を活かしたまちづくり

田川市民の誇りである「地域の食の美味しさ」を、地域の内外にアピールしていくには、地域の農業を活かしていくことが重要となる。また、農家の高齢化にともなって増加傾向にある耕作放棄の解消に向けて、子供の教育の場としての活用や、福祉の場としての活用など、幅広い活用方法を検討していくことが重要となる。

●ワークショップの参加にあたって

■個人情報の取扱い

- ・ 個人名が特定される情報は公開されない。
- ・ この場で聞いた個人に関わることについて、他でしゃべったりSNSで拡散しない。
- ・ 個人的なことで、話したくないことは話さなくてよい。

■ワークショップ参加時にお願いしたいルール・参加姿勢

- ・ 普段おしゃべりをするような気軽な気持ちで。
- ・ 思ったことをためらわず口にする。
- ・ 人の意見に共感的に耳を傾ける。
- ・ 相手の発言を非難・否定しない。
- ・ 多様な考え・視点を歓迎する。